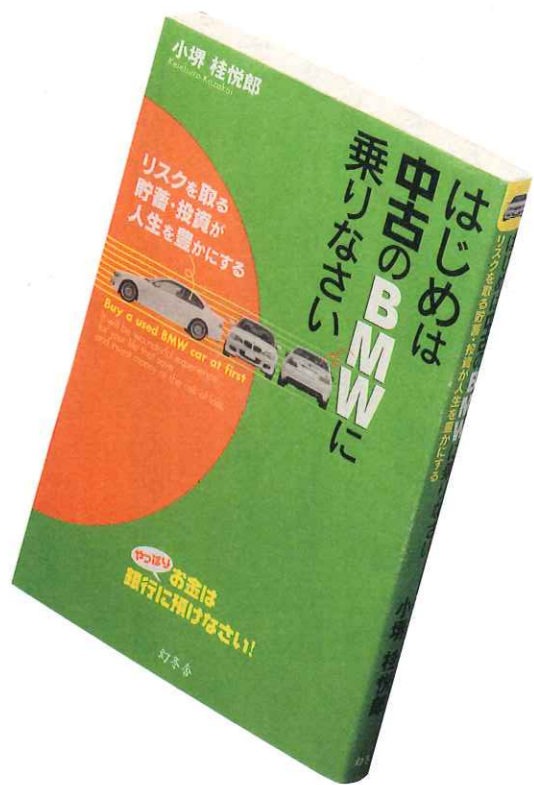


お金の生かし方は 自覚があるかどうかで変わる

中小企業専門の経営コンサルティング業務を手がける小塚桂悦郎さん。自らの失敗も踏まえつつ、個人向けの貯蓄・投資本を書き上げた。車、住宅、貯蓄、投資…。誰もが悩むお金の使い方を明瞭に指南する。

text by 福田純子 + photograph by 都築雅人



『はじめは中古のBMWに 乗りなさい』

小塚桂悦郎著
幻冬舎
1470円

企業の資金繰りコンサルタントが明かす「誰もが知るべきお金のリスク」。世の中のお金の流れや株式投資、不動産売買など、人生の転機となるテーマごとにお金の使い方を伝授する。

「2006年に出版した『なぜ、社長のペンは4ドアなのか?』シリーズが、中小企業の経営者向けであるのに対し、本書の内容はぐっと一般向けになっていますね。」

もともと僕は中小企業の経営者相手の仕事をしているので、「ペント本」は自分の仕事に沿った内容で構成しました。実は、あの本があなたに幅広い層の人たちに読まれるとは思っていませんでした。結果として読者層が広がったのですが、そのことで経営者以外の方からも多くの質問が寄せられるよ

うになりました。こんなにもたくさんの方が疑問を抱えているのなら、そのテーマに沿った内容で本を書いてみようかなと思ったのがきっかけですね。

過去に書かれた『粉飾パンザイ!』なども衝撃的なタイトルですが、本書も金融業界からすると「そこまで赤裸々に書かれては…」という内容が含まれています。立場上どの視点から書くか苦労されたのではないかと思っています。そうですね。でも苦労したのは、

読者に対してどこまで強く言うかという点です。中小企業の経営者向けであれば、ある程度強めに言っても大丈夫なんです。経営者たちは、信念を持って会社を運営していますし、お金に関する知識も持っています。僕の書いていることが自分の考えとは違う場合、受け流すことができるんです。でも、一般向けとなると、人それぞれ持っている知識量が違うので、僕の考えを押しつける形にならないように気をつけなければならぬ。かといって、甘いことばかりも言

と、このスタイルが一番しっくりきました。専門用語や計算式を並べると、それを理解するための勉強が必要になってしまう。難しい計算式を羅列することより、理解してもらうことが大事です。から。

車の購入、預金、投資、住宅購入、独立・起業と、多くの人が一度は考えるであろうテーマが盛り込まれています。小塚さん自身、若い時に車で失敗したそうですね。

一番大きな失敗ですね。10台目くらいまでは試乗もせずに買っていました。1台目は父親の車に乗っていたんですが、銀行員時代に涉外(得意先回り)で車のディーラーさんを訪ねたりすると、「ウチから買ってよ」と言われるんです。おつき合いもありますから、そう言われると「100万円くらいのものでいいですよ」とカタログだけ見て決めてしまっ。車なんて何でもいと思ってるので、何がどう違うのか、何がいいのか分からない。だったら手の届く範囲内のを買おうと。乗っているうちにだんだん飽きてきて、次の車に買い替える。結

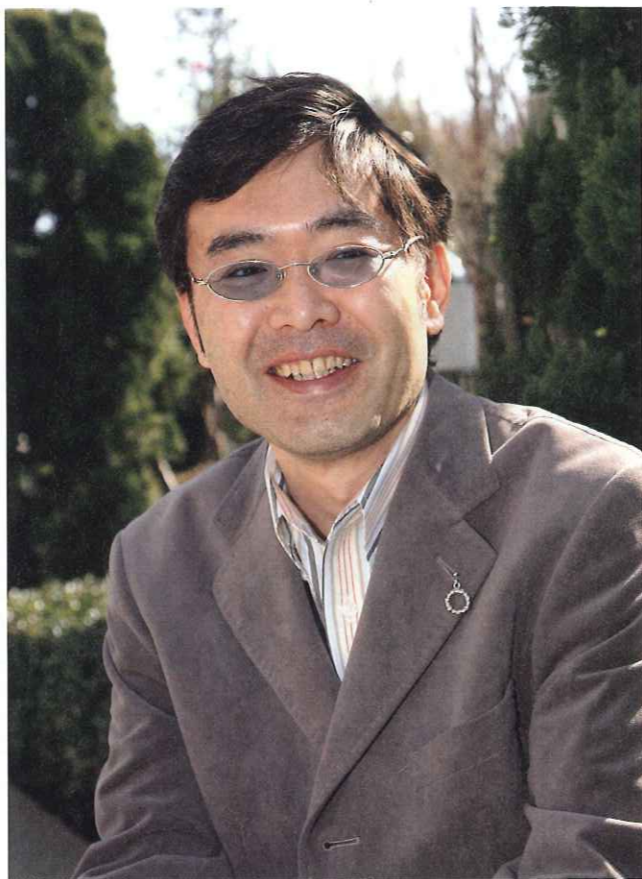
局十数台の車にお金をつき込みました。車好きだという自覚がなかったんです。車なんて走ればいいと思っていれば、飽きる。という感覚がないと思うんです。僕の問題は、自覚がなかったことです。この本は、当時の自分に向けて書いた部分もありますね。

自覚があるとお金のかけ方も随分違ってきます。

東京で暮らしていると車の必要性は低いかもしれませんが、地方だと車がないと生活が成り立たないことが多い。僕の場合も、生活に必要なという意識が、車好きを自覚する妨げになっていたのかもしれない。

「僕ひよっとして車が好きかも」と思ったら、考え方が変わるでしょう。好きなもののために、有効にお金を使うようになる。

自分が何にどのくらいお金をかけているのか、どういうお金の使い方をしていくのか、それを自覚することが重要なんです。同じ金額を使うにしても、自覚があるのとないのでは、お金の生き方が変わってくるんです。



小塚桂悦郎氏
Keietsuro Kozakai

経営コンサルタント

銀行の融資係を経て、大手税理士事務所へ転職。銀行対策を含めた資金繰り重視のコンサルティング業務に専任する。2001年に独立し、翌年4月、小塚コンサルティング事務所を設立。著書に『なぜ、社長のペンは4ドアなのか?』『借金パンザイ!』『粉飾パンザイ!』(いずれもフォレスト出版)など。

いたくない。その辺の、強さと甘さのバランスは悩みました。

表や計算式の解説を極力抑えて、展開をストーリー仕立てにしています。このジャンルの本ではあまりないスタイルだと思えます。これはやはり読みやすさに重点を置いたからでしょうか。

僕自身、教科書っぽい本が苦手だというのも理由の一つですが、書きやすさと読みやすさを考える